

第一百六十八号

CO患者——
西村 保 さん

いのちの労働

A black and white photograph of a man standing in a field of tall, leafy plants, possibly tobacco. He is wearing a light-colored, long-sleeved shirt and dark trousers. The background shows a line of trees and a small building.

万田鋤入社

の坑内で、採炭や掘進、あるいは仕繰や運搬、機械、電気などの仕事に立ち働いていた者ばかり。余儀ないことだとはいえ、それが今では農園で、もっぱら木や野菜、草花類の栽培。剪定、除草、施肥、消毒などが仕事だ。「あの爆発さえなかったら……」と、だれがぐやまずにいられよう。

西村保さんは、この農園で働くそんなＣＯ患者の一人である。

せめてよろこんで働ける炭鉱にしなければ……

人生は一度とやり直せず

は当然だつたろう。

ついに中毒

西村さんがその日、三川鉦の三百五十メートル坑道の、とある所近くの人車乗り場付近で、意識をうしない、倒れているところを助けられ、三井天領病院にトラツクで運びこまれたのは、大爆発が起きた翌昭和三十八年十一月十日の夜明けに近いことになったという。

からくも、そのうちに意識をとりもとすことのできたものの、そのときすでに彼の中核神経細胞は、侵襲してきた猛毒の一酸化炭素ガスのために、も早や取り返しのつかないほど傷めつけられていたのである。意識が回復したよう

人間今と昔

人間今と昔

三井資本は、相変らず今も坑内保安を輕視しながら、働く仲間を命を奪ひ続けている。

CO患者の西村保さん。ある雨あがりの日訪ねた農園で彼は菊苗の手入れ中だった。といつても、その仕事に果たしてどこまで興味をもっているのか……？

一家は、生家から一時虎尾市緑ヶ丘桂町の三井鉱山社宅に移り、さらにその後、今の住居に移ったのだった。だが、これは今の住居に移ってからのことである。

その日は、庭先で何となく過ぎていた。そのうちに、突然ガタガタと得体の知れぬ音がきた。おどろいて見つめている幸子だったが、彼は次の瞬間近くにころがついていた棒を取るや否や「くそっ、打ち殺すぞ」とわめきながら、いきなり手にする棒をビュンビュンふり回し始めたのだ。

不意のこの感情の爆発。幸子さんも原因のつかみようがなかったが、以来そんなことがたび重なり起きるようになり、そのたびにまわりの家族がどれほど泣いてきつたことか。

人間今と昔

「精神症状」軽い情意鈍麻、軽妻の幸子さんは、すでに長く市内の某企業の現場で働きながら、傷ついた夫の命をささえてきた。彼女がこどもも語る――

「同じ人間として、生き甲斐のある生涯を果たしとうございしました。でも、もう一度私たちは、そんな人生を再び生き直すことはできない相談です。ですから、この三池炭鉱に、働く人びとがよろこんで働きにやってくる、せめてそんなやまにするために、闘わなければならぬと思っています。そのため、今起きている裁判は絶対に勝たなければなりません。とにかく思っても見てください、二度とやり直しのできぬ人間にされた者のくやしき、またその家族のくやしきを」

三井資本は、相変らず今も坑内保安を軽視しながら、働く仲間への命を奪い続けている。

願いは何か

だ。
あの太平洋戦争がいよいよ激しくなり、熊工生だった彼は、いや応なしに学徒動員でびきずり出され、銃後の産業戦士として日発の火力発電所（今の港発電所のあたり）へ。
わが国の敗戦。不幸にして、戦後の恐るべき荒廃から再び学校へ帰ることができなくなり、万田鉦

突然の被災

さんのもとへ嫁いできた。昭和三十一年の二月五日のことで、夫の西村さんが二十七歳、妻の幸子さ

「おめでとうございます」と母親の幸子さん
は顔をほころばせた。同家を訪ね
たつい先日のことである。

ガンヅメ押しや除草。秋の収穫や
粃摺り。たとえ農家から嫁にき
たという幸子さんにも、骨の折れ

開けて、一点にじいっと目を握え
たままでした」と、幸子さんが述
懐するところからも、彼が今や一

されている輩によつてその平静をさ
 さえられているばかり。
 事実、上記のようなCO患者

恵まれた子どもは二人。長男の秀美さんが二十四歳（三十一年八月七日生まれ）で、次男の良（二さんが二十一歳（三十四年四月十二日生まれ）。秀美さんは、熊本工業大学の電子工学科を卒業して、今は近くの一企業に家から通勤。弟の良（二さん）も、兄の後を追うよ

突然の被災

あの炭じん大爆発に被災したのは、当の西村さんが三十四歳、妻の幸子さんが三十歳で、結婚して七年めのことだった。

そのころ西村さんたちは本籍の生家において、まだ壮健だった彼の実父母とともに暮らしていた。毎

それに子どもたちも、上の秀美さんが七つで、やっと小学校の一年になったばかりで、下の良三さんはといえは四つ。幼稚園にも通ってはいなかった。

そこへ、大黒柱の西村さんの大爆発被災だったから、幸子さんにすれば氣も転倒する思いだったの

不意の爆発

き爆発と云い、反面、たとえ職場にあっても家にいても、あらゆることに何一つ人間としての興味をもつことなく、ただ「ばきー」と座っているばかり「(幸子さんの評)という今の彼から、選ばれて県立の工業学校に進学し、くる日くる日をあはれほど積極的に生き、

さを思へ
る炭鋤にしなれば……

れてからでさ
べるまでもな
は彼の体のな
だ。その間、
変わってしま
あった。

願

仲間とともに見て
圖い抜いたかつての
として探し求めること
は何か